

【視点】

「失われた10年」で変わったもの

櫻井 知能

旧年来、日本経済の「失われた10年」という言い方で、我が国がやり残してきた課題の大きさが強調されている。他方、「この10年」で、日本の経済社会には随分変化が起きているのではないかとの指摘も目につくようになってきた。そんなことを考えていると、中国史の大家である宮崎市定先生の、これまた中国文学の泰斗である吉川幸次郎先生の『宋詩概説』という本の書評の中のこんな文章に行き当たった。「著者曰く、『一つのたとえを立てれば、唐詩は酒である。容易に人を興奮させる。・・・宋詩は茶である。酒のごとき興奮ではない。・・・それはまたたとえだけではない。茶を飲む詩は、宋の蘇軾、陸游に至って、はじめて盛んに現れる。唐詩には少ない。』と。その背景を歴史的に考えると、唐代までの生活は、たとえ貴族であっても、外観が豪奢なように見えながら、実は内容の甚だ貧弱な、粗末なものにすぎなかった。・・・その上に政情も経済界も不安定であったから、・・・酒でも呑んで一切を忘れるより外なかった。・・・それが宋代になると、生産力が向上し、輸出も好調で好景気の時代に入る。そのような社会情勢の下で初めて詩人も日常生活の中に喜びを見いだすことが出来るようになったのであろう。」

ところで、我が国では、最近中国茶が静かなブームになっているようだ。国土が広いだけに黒茶、紅茶、青茶、黄茶、緑茶、花茶等様々な種類があり、また、それぞれに飲み方、入れ方に工夫がいる等複雑な奥行きのあるところが人を引きつけているらしい。解説書や写真集等も出版されているが、何故か平成6、7年以降に刊行されたものが多い。バブルの最盛期には、中華の世界もグルメ・ブームであったが、この時期に人々の嗜好が食から茶へとやや移行したように見える。贅沢を極めた飽食の後で中国茶の減肥効果が求められただけなのか、あるいはゾンバルト風に我々の欲望が萎縮したとみるべきか、それとも不景気の中で安上がりに茶でも飲んで我慢しようということなのか。しかし、中国には、茶道楽を誡めた一要閑、二要銭（一に閑、二にお金）という言葉があるそうで、お茶必ずしも安上がりというわけでもない。

漢詩のテーマの移り変りに、中国社会の変化を読みとろうとした先学の論法を借りて、こうした飽食から喫茶への嗜好の変化を、我が国の社会が非日常的な贅沢ではなく、日常生活そのものの奥行きと工夫の中に豊かさを求めるようになりつつあることのひとつの現れと見ては買い被りすぎであろうか。お茶を飲めば世の中が変わるというものでは勿論ないが、経済の再生を考えるうえで、「この10年で変わったもの」の見きわめが求められるようになってきたことは確かなようだ。

"From Gourmet to Tea Party - a change in the Japanese life style during the last decade"

[さくらい ともよし]

[財土地総合研究所 専務理事]